

巻頭言

「正しい問い」を得るために

年2回、前期と後期に発行される『経済学雑誌別冊 講義資料』は、その年開講される講義のための知識や情報の一部をあらかじめ学生の皆さんに提供し、受講の便宜に供することを目的としています。勉学のために存分に活用して下さい。

しかし、この講義資料を、高校時代のテキストや参考書と同じようなものと考えてもらっては困ります。高校までの勉強、特に大学入試のための受験勉強では、あらかじめ決まった「正解」という目的地に向かっていかに速く効率的に到達するかということが問題ですが、大学の学問においては「正解」自体が必ずしもはっきりしないのです。もちろん「正解」がないわけではないのですが、その多くは、研究の進展につれてより優れた「正解」に置き換えられることが予定されているという意味で、暫定的なものであり、また、経済学などの社会科学や人間科学においては、暫定的な「正解」が複数個あったり、そもそも「正解」なるものが分からないという場合すら少なくない。したがって大学の学問においては、より優れた「正解」を探したり、複数の「正解」の間で迷いながら考えるということの方が、「正解」に速く到達することよりはるかに重要になるのです。

これは、高校までの勉強に慣れた学生の皆さんには意外にむずかしいことかもしれません。勉学意欲に燃えた皆さんのなかにも、これまでの習性が抜け切れず、一刻も速く「正解」にたどり着くのが「勉強」だと思い込んでおり、「『正解』はないかもしれない」などと言われるといらいらしたり、場合によっては怒ってしまいさえする人が少なからず見受けられます。しかし、それでは大学の学問になりません。

「正解」を探究し、迷いながら考えていくために最も大切なことは、平凡ですが、疑問あるいは「問い」を持つこと、一回だけでなく、さまざまな「問い」をねばり強く持ち続けるということです。日本経済を勉強しようとするなら、「日本経済はいまなぜ不況なのか」「昔はなぜあれほど高度成長したのか、そして、これからはどうなるのか」等々の疑問がまずなければどうしようもありません。「問い」がなければ「答え」を見つけようとする意欲も気力も起こりようがないからです。「問い」がまずあって何らかの「答え」が見つかり、その「答え」への不満をバネとして次の新しい「問い」が生まれ……という一連の問答の過程を通して、わたしたちの認識は深まっていく。社会科学や人間科学のような高度に複雑な学問においては、決定的な「正解」は遂に得られず、より正確でより深い「問い」、いわば「正しい問い」を得ることだけが、わたしたちにできることかもしれないのです。

この講義資料が、「正しい解答」よりむしろ、以上のような意味での「正しい問い」を得るためのガイドブックとなってくれることを期待します。

2001年4月

大阪市立大学経済学会会長

佐藤 光